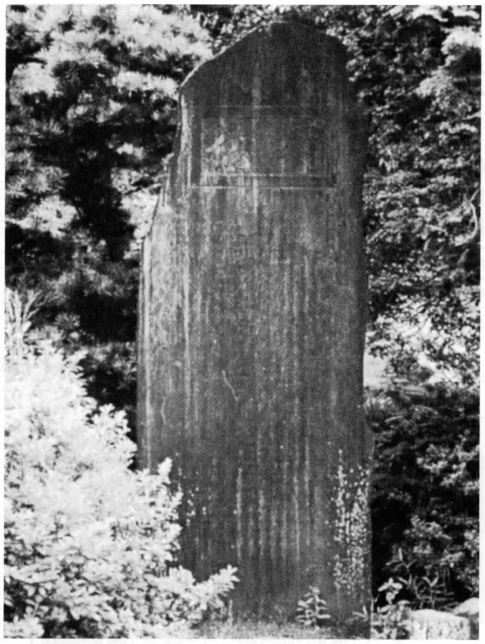
香取遺産

vol.147

―私塾から小見川高校へ―
渡邊操と「無逸塾」

渡邊操（存軒）写真



渡邊翁頌徳碑
久保地区（大日神社境内）

かつて、市東部の久保地区には、中等教育機関であった私立「無逸塾」がありました。この塾は、渡邊操（存軒）が明治17年（1884）に、小学校を終了した青年たちがさらに中等教育を受ける必要性を痛感して創設したもので、幾多の変遷をたどりながらも現在の県立小見川高等学校へとつながっています。

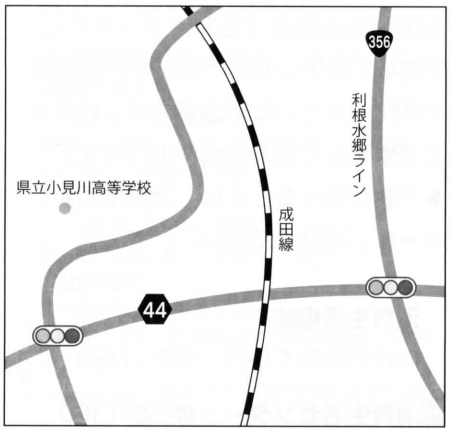
渡邊操は、安政2年（1855）に当地で生まれ、十代の頃、隣接する阿玉台地区の宮崎藤太郎に漢学を学びました。明治13年（1880）に26歳で上京、東京帝国大学で講師を勤めていた信夫恕軒が主催する本所深川の「奇文欣賞塾」（漢学）に入塾し、後に塾頭まで上り詰めます。

明治17年3月に卒業と同時に帰郷。同年11月、自宅を教場に漢学の「無逸塾」を開き、経史・史学・文章学を教授しています。塾名は、文学博士中村正直（敬宇）から書経無逸篇の一句「所其無逸（其の逸んずる無きを所とす）」を揮毫してもらったことにちなんで、名付けられました。

明治19年に塾舎一棟を新築、この落成式には、信夫恕軒や香取郡長・大須賀庸之助から祝辞が寄せられ、香取・匝瑳・海上三郡の期待がいかに大きかったか分かります。翌年には教科に英語と数学を加え、修業年限を3年とし、同24年に教室と講堂（運動場）を新設しています。明治30年には学業年数を5年に延長、尋常中学校に準じる教育を行っていましたが、同33年には、村立良文農学校に移行。この年には旧制佐原中学校が新設されています。

その後は経営難から私立良文農学校として存続、大正5年（1916）には塾創設から30年が経過し、2000人あまりの同窓生が渡邊操の頌徳碑建立を計画し、同7年に完成し、開校三十周年記念式典が盛大に挙行されています。

ところが、大正9年3月に渡邊操が66歳で急逝、その3年後に学校は町立小見川農学校として引き継がれました。このように一私塾が公立高校に移行する事例はまれであり、地域のオピニオンリーダーであった渡邊操の信念が結実したものと思われます。



問 生涯学習課 ☎(50)1224